

## 島根県立美術館の二つの絵画展を観て

酒井 董美<sup>ただよし</sup>

この15日午後、知人と島根県立美術館へ出かけた。第61回島根新協展に出品している共通の知人・山根健治君が出品しているアクリル画を見るためであった。

ギャラリー第1室には同人17名の作品31点が出品されていた。健治君のは狼の「遠吠え」(アクリル水彩50号)と風景画「八雲」(油彩アクリル30号)の2点が並んでいた。前に見たときも犬の動物画だったが、彼の描く動物の描写には、それなりの動きが隠れていて、なかなか見事なものだった。

他の出品作品もそれぞれ懸命の力作であり、普段絵には関係のない仕事をしている筆者にとつて、出品者たちの懸命な息吹が感じられ、よい刺激を与えてくれる。それは絵に限らず書を見ても同様である。

ただ今回はスマホで撮すことはしなかった。ところが、隣室(第2室)では、洋画とは違い日本画の展覧会が開催されていたので、せっかくなら一緒に鑑賞してみようと思つてみた。

ここは第5回丹青会と銘打っていた。そして会員11名の作品16点と村居正之講師の賛助作品1点が展示されていた。

絵には素人の筆者である。日本画ではあるものの、前室の西洋画と比較してみても、余りその違いは分からなかったというのが、偽りのない感想であった。

つまり、この部屋は日本画展とあるので、これらの作品は日本画なのだと思われるが、何の前ぶれもなく作品だけを見せられるとすれば、日本画と即答する自信はない。ただいづれも色彩豊かにしっかりと描かれていて、これが日本画と言えるのだろうかと思えばかりであった。

山根健治君も「日本画展の作品もなかなかよく出来ています」と感心していた。

新協展ではカメラを向けなかった筆者だったが、この丹青会では入口の鳥づくしの絵について興を誘われて、スマホでパチリと一枚だけ撮影したが、ここにある写真である。

受け付けの方と話したところ、たまたま作者である森脇純子さんとのこと。「撮影してもよろしいですか」と尋ねてみたら、快く「かまいません」と答えられたので、遠慮なく撮したのであった。

絵はからしき縁のない筆者だが、こうして時どき、知人から案内を受けて書道展や絵画展に出かける。そして作品に接することで、心が洗われるような爽やかさを感じ、それが言い知れぬ魅力となってまた出かけたと思う筆者なのである。



森脇純子「視線」第5回丹青会会場で(令和4年7月15日)

島根県立美術館